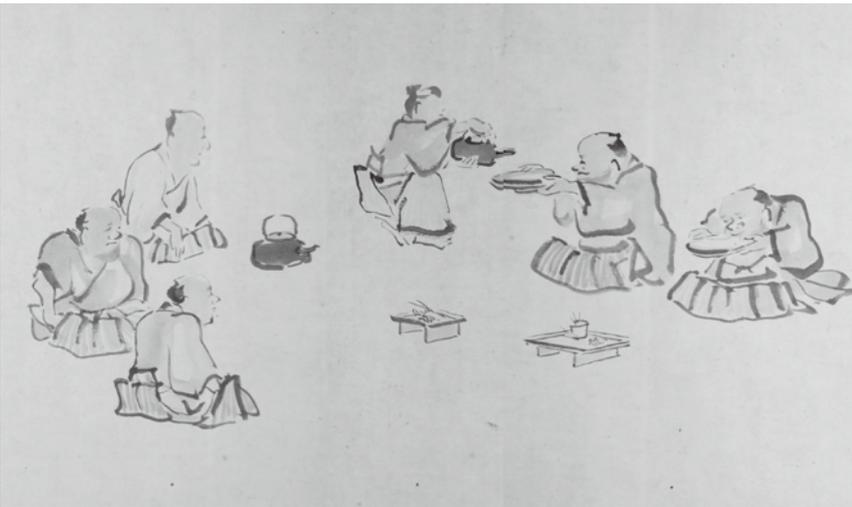


もくじ
 千住の酒合戦と鬪飲図巻 1P 「荒川の五色桜」異聞 2P
 スタディデイ開催 4P 西加平神社新社殿落成 4P



谷文晁・谷文一（一世）「鬪飲図」当館蔵

文化十二（一八一五）年の千住の酒合戦の後につくられた鬪飲図巻のことはよく知られる。巻頭の大書が「高陽鬪飲」のもので「太平餘化」のものがあるが、同時期につくられたものと考えられてきた。図巻を構成する大田南畝の「後水鳥記」を精査すると、高陽鬪飲の系統（流布本）と太平餘化の系統（別本）では内容に違いはないものの、現存する草稿と比べ、それぞれ特有の脱漏部分があり、主要な見物客である酒井抱一・谷文晁・亀田鵬

齋の表記も明瞭な違いが見られる。流布本は、会津の旅人河田某の部分で「きかしむるに、次の日辰のときに出立しとなん」の書漏れがあり、文が不自然に途切れる。見物客の表記は「屠龍公・文晁・鵬齋」となる。別本は、盃の名称の部分に「一升五合入 緑毛龜盃」の書漏れがあり、使用された盃は五つで、一升五合入である万寿無疆盃は二升五合入のよ

うに記される。見物客の表記は「抱一君・写山・鵬齋」となる。流布本は、日本随筆大成などに収められる大田南畝『一話一言』の翻刻の際に、図巻から「後水鳥記」を追補した「高陽鬪飲巻」や江戸叢書の『高陽鬪飲 後水鳥記』の翻刻で容易に見ることができた。このため、流布本と表記したものである。ただし、どちらも底本となった図巻の誤写・脱漏という不備から正しい姿は伝えていない。わかり易い箇所としては、門前の聯が正しく「南山道人書」と記されず、「兩山先生」「南畝老人」と記される。南畝の自筆草稿「後水鳥記」は、天理図書館蔵の『蜀山雜稿』に収められる。草稿との比較では、これまで見た流布本の図巻や写本の中で、安政六年・山本琴谷摸の福嶋憲太郎氏旧蔵の『高陽鬪飲巻』図巻が最も原形を保つものと思われる。別本は、足立史談76・77・78号に

千住の酒合戦と鬪飲図巻 (一)

佐藤秀樹

足立史談

第580号

2016年6月15日

足立区教育委員会

足立史談編集局

足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(28-308)

瀧善成氏が報告されたニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵の図巻（『鬪飲記』）が代表的なものである。このニューヨーク本図巻を瀧氏は、印影を主な根拠として、流布本の原本と考察されたが適切とはいえない。前述のように、特徴的な脱漏から、成立時期が異なる別系統のものとするのが妥当である。別本を見るには、早稲田大学図書館蔵の図巻がインターネット上に画像公開されているので、「高陽鬪飲」で検索すれば容易に探すことができる。精密な摸本で画像も高画質のものである。ニューヨーク本図巻に似るが、巻頭の引首印を持つことから、引首印のないニューヨーク本図巻を写したものでないことがわかる。足立区立郷土博物館蔵の『後水鳥記』図巻も別本だが、谷文一の鬪飲図と南畝の「後水鳥記」で構成される抄録版で、後半分は余白である。抄録版である以上に、この図巻は特異である。鬪飲図では、通常は参加者の脇に座るだけの人物が起ち上がり、大盃に酒を注いでいる（上段写真）。「後水鳥記」も、他の別本では脱漏する、盃の名称前の「出すその盃は」が正しく記される。左に寄る南畝の書癖や文末の居号「緇林楼」の筆跡からこの図巻は南畝自筆と認められる。図巻の見返し「春城清玩」の蔵

書印から早稲田大学初代図書館長市嶋春城氏旧蔵とわかる。早稲田大学図書館蔵『安田文庫へ譲り渡し写図書目録、割譲目録副本』に「蜀山後水鳥記」とあるのが、この図巻とみられる。安田文庫は二代目安田善次郎氏の著名コレクションである。

郷土博物館蔵の図巻は、小山田与清『擁書樓日記』文化一四(一八一七)三月三十日に記載の南畝が贈った「続水鳥記」と推定され、この別本の成立は文化一四年と考える。与清の蔵書は、弘化三(一八四六)年水戸藩に献納されたが、献納目録に「続(後)水鳥記」の記載はない。

(元郷土博物館職員)

▲荒川の五色桜 異聞 ▲船津静作とチェリー・イングラム

樋口 恵一

イギリスのロンドン在住のジャーナリスト阿部菜穂子さんが、今年3月に、「チェリー・イングラム」(岩波書店)を出版した。これはイギリスの桜収集家・桜研究者であるコリン・グッド・イングラム(一八八〇—一九八一)について、イングラムの孫などが保管している日記や資料などを調べ上げ、本にまとめたものである。

このイングラムの日記のなかに「荒川の五色桜」とその桜守である船津静作(一八五八—一九二九)に

ついでの詳細の記述があり、貴重な資料なので阿部菜穂子さんに資料を頂き、ここにまとめてみた。

一 船津静作とイングラムの出会い

イングラムの日記によると、イングラムが日本の桜を調査するために来日したのは、今から九十年前の大正十五年(一九二六)である。

イングラムが日本の桜について興味を持ったのは、一九一九年、この来日の七年前、ドーバー海峡に近いケント州のベネンドンに新居を購入した時である。「ザ・グレンジ」と呼ばれた貴族の別荘で、そこに植えられていた日本の桜(のちに「北斎」と命名)の美しさに魅了されてからである。

これを契機に、イギリス国内の植木商はもとより日本の植物専門商社やアメリカの植木会社などを通じ、多くの日本の桜を調達し、「ザ・グレンジ」に植えた。一九二五年における「ザ・グレンジ」における日本の桜の品種は七十種にもおよんだ。イングラムは、この年にヨーロッパ遊学中の鷹司信輔とイギリスで知り合い、鷹司に日本での桜の調査協力を依頼する。イングラムは七十種類の桜だけでなく、もっと多くの日本の桜を収集したかったからである。鷹司は、初代渋沢栄一の後を継ぎ、二代目の「櫻の會」会頭に就任する人物である。鷹司は、後述する「太白」の命名者でもある。

鷹司のおかげで、イングラムの日本での桜の調査は順調に進むことになる。この調査の一環として、当時南足

立郡江北村の船津静作のもとを訪れたのは、四月二十日のことであった。船津静作を訪ねた際、「櫻の會」の事務局を務めていた、帝国ホテルの前総支配人林愛作が通訳を兼ねて同行していた。

荒川堤の桜は、「荒川の五色桜」または「江北の五色桜」と呼ばれ、主に江戸時代に栽培された里桜のうち、染井の植木屋「梅芳園」・高木孫右衛門が集めた七十八品種、約三千本の桜のことをいう。あとで補植されたものを合わせると百九品種が植えられたと推定される。当時、日本だけでなく世界的にも有名な里桜の名所になっていた。

船津静作はこれらの桜の樹形や花の色、大きさなどについて独自に研究を行い、品種判定では右に出る者がいかなかったという。桜博士と言われた東京大学の三好学博士も、桜の研究にあたっては、船津静作に教えられることが多かったという。

イングラムは、訪ねた船津邸で、静作が角井厚吉に描かせた五十七枚の「江北桜譜」についてそれぞれの花の特徴など詳細の説明を受けた。その後、静作は奥の部屋から一幅の掛け軸を出し、描かれた桜の絵をイングラムに見せた。「この桜は、私の曾祖父(※船津久五郎、絵師文淵か(編))が百三十年以上前に描いたものです。昔は京都付近で見られましたが、どうも絶滅してしまっただけで、どこを探しても見つからないのです」と伝えた。その桜は並外れて大きい、一重の真っ白な桜で、名前を「アカツキ」といった。

その掛け軸の桜を見てイングラムは驚いた。イギリスのケント州にある自分の家の庭にある桜(グレイト・ホワイト・チェリー 日本名は「太白」)に間違いなかった。

「船津さんに伝えて下さい。私の庭にこの桜があります」と、通訳の林が伝えると、静作は黙ってただほほ笑み、イングラムに向かって深々と頭を下げたという。

「船津さんは私の話を信じてないかもしれない。でも、必ず、この桜を日本に里帰りさせる」、イングラムはこう心に誓った。

そのあと、静作の案内で荒川堤の桜を見た。イングラムはその時の様子を後のイギリスの園芸雑誌へ寄稿した記事のなかで次のように書いている。

「静作はまるで、愛情深い親がわが子の自慢話をするように、一本一本の桜について、その美しさや値打ちを語ってくれた。フナツ氏の瞳は桜への情愛できらきらと輝いており、私を幸せな気持ちにした」

二 太白の里帰り

イギリスへ帰った翌年、昭和二年の冬、イングラムは「櫻の會」にて「太白」の穂木を送付したが、日本に着いた穂木は枯れてしまっていた。

翌年、鷹司の助言で、京都の桜守・佐野籐右衛門が紹介される。当時は十四代の籐右衛門で、十五代籐右衛門と二人で「太白」の里帰りに取り組むこととなる。

昭和三年、四年とイングラムに同じように穂木を送ってもらったが、日本に届いた時には枯れてしまっていた

た。送付中の乾燥が原因かと、昭和五年にはダイコンに挿して送つてもらうが、同じように枯れてしまつていた。

十五代佐野籐右衛門は穂木の輸送ルートがスエズ運河経由で、赤道近くを通る南回りであることに気がついた。輸送ルートの寒暖差で枯れてしまうのではと推測した。

そこで、昭和七年には、シベリア鉄道経由で穂木を送付してくれるようイングラムに依頼した。イングラムは乾燥防止にイギリスの主食であるジャガイモに挿して梱包した。

シベリア鉄道の終点であるウラジオストックからナホトカ港を経由し、船で舞鶴港に着いた「太白」の穂木は、こうして生きて日本に届いた。早速、佐野籐右衛門の手で大島桜の台木に接ぎ木され、イギリスから日本への「太白」の里帰りが実現したのである。

イングラムが船津邸で掛け軸と出会ってから六年がたつていた。「太白」を探し求めていた船津静作は、「太白」の里帰りが成功する三年前、昭和四年に他界している。

静作が「太白」(アカツキ)の里帰りを知つたらさぞ喜んだであろう。

五色桜

大正十五年、イングラムが荒川堤で見た桜の品種として、「白妙、駒繫、泰山府君、手毬、白雪」などを挙げている。丁度「駒繫」が満開だったようで、日記では「一重で、色は白でピンクがかつている。大きさは約三・六センチメートルほど」と記し

ている。

この「駒繫」は、明治十九年に植えられた桜の品種の中には見当たらない。大正九年に補植された五十九品種の桜のうち一品種である。名前の由来は、親鸞聖人がこの桜に馬をつないだ故事による。かつては京都の青蓮院の門前にあつたという。

荒川堤でのその後の調査では「駒繫」の品種名は出てこない。大正九年に植えられ、偶然イングラムの目に留まつたものの、ほどなく荒川堤から姿を消した幻の桜である。

現在、多摩森林科学園などで見られる「駒繫」は、ほぼ太白と同じ形状であり、イングラムが日記に残した「駒繫」とは明らかに違う。

イングラムの依頼で、「櫻の会」が昭和二年にイギリスに送付した荒川の五色桜の七品種「手毬、駒繫、一葉、福祿寿、白雪、便殿、松月」のなかにこの「駒繫」があるが、日記では、接ぎ木してみたら「駒繫」ではなくて「白妙」だったのでがっかりした、との記録がある。阿部菜穂子さんの調査では、現在のイギリスでは「一葉、福祿寿、便殿、松月、白妙」が見られるという。「荒川の五色桜」の子孫の可能性がある。

また、日本の桜はイギリスの王室の庭園にも植えられている。エリザベス女王が宿泊されることのあるウインザー城に隣接する「ウインザー・グレート・パーク」の一角には、太白や白妙などの日本の桜が植えられている。

皇太后と現エリザベス女王は、桜好きで知られているという。

四 都市農業公園などで見られる「北齋」と「太白」

イングラムゆかりの桜であるこの「北齋」と「太白」は、都市農業公園など区内の公園で見ることができるといふのは、この二品種の桜は昭和五十六年のワシントンからの「桜の里帰り事業」で足立区に里帰りした三十四品種に含まれており、これらの桜は区内の公園などに植えられたり、区民や他自治体などに配布された。

この「北齋」と「太白」は十九世紀頃に日本からイギリスに渡り、イギリスからアメリカに渡り、アメリカから日本に里帰りした、いわば地球を一周した珍しい桜といえる。「北齋」は品種としても珍しく、花びらは八重でピンク、内側は白く、中心部は濃い緑、花卉がややらせん状に咲く気品漂う綺麗な桜である。「太白」は花の大きさが約五・五センチメートルと並外れて大きく、一重の純白の桜で、一目で「太白」とわかる。「北齋」は公園などに植えられたり、区民に配布されたが、樹名板がつけられ、品種管理が徹底しているのは、この都市農業公園の「北齋」だけかもしれない。

来年の桜のシーズンには、チェリー・イングラムを魅了し、おそろしく一世紀を超えて日本に里帰りした「北齋」と、荒川の五色桜の桜守・船津静作が長く探し求めた「太白」(アカツキ)を、都市農業公園などで是非ご覧いただきたいと思う。

※「櫻の会」は大正六年創立、戦中の昭和十八年頃に自然消滅した。

【参考資料】
「イングラムの日記」安部菜穂子提供
「チェリー・イングラム」安部菜穂子著 岩波書店 二〇一六年



1926年来日時イングラム博士 (当時の新聞の切抜き)



太白 撮影 都市農業公園 2016年4月



北齋 撮影 都市農業公園 2016年4月

(桜研究者 元足立区職員)

スタディデイ開催

当館では、三月十三日から五月二十二日までの間、「文化遺産調査特別展 美と知性の宝庫 足立」と題する展示を開催しました。文化遺産調査は、平成二十二年度に、足立区の仏教遺産、生活資料、歴史画像資料の三分野を対象として実施されたもので、大きな成果を挙げたことから、平成二十七年より新たに美術資料を中心とした第二次文化遺産調査を開始しました。今回の展示もその成果を公表したものです。幸いなことに、区民の方はおもたより、美術史を研究されている方々からも好評を得ることができました。

展示期間中には、関連事業として五月十五日に「スタディデイ 足立区立郷土博物館―展覧会への新しいアプローチ―」を当館講堂において開催しました。スタディデイという言葉は、日本ではまだ馴染みの薄い言葉ですが、世界の博物館・美術館ではしばしば行われているもので、公開研究会といった意味の言葉です。当日は、展示の調査・展示等のご指導をいただいた三人の先生方に研究の成果をお話いただきました。

武蔵野美術大学の玉蟲敏子教授には「船津文淵写『屠龍之技』―弟子世代における抱一と文晁―」と題しお話をいただきました。当館では、谷文晁の弟子で、上沼田村（現足立区江北）の絵師だった船津文淵が筆写した酒井抱一の『屠龍之技』を所蔵しています。これについて玉蟲教授は口絵部分にあたる場所に鈴木其

一の「墨梅図」が描かれていることなどを指摘し、谷文晁・酒井抱一・鈴木其一、そして船津文淵の四人が資料の中で出会ったことの意味を考察され、同書が日本美術史を研究する上でも大変貴重であるとのことのお話でした。

昭和女子大学の鶴岡明美准教授には「写山楼の最新研究―文晁・文一とその後―」と題しお話をいただきました。これまで不明確だった谷文晁の画塾である写山楼の位置を推定し、谷家の身分と写山楼の場所が関係していることを明らかにされました。その上で、文晁の養子である文一（一世）、その実子文一（二世）の来歴などを整理されています。

川村学園女子大学の真田尊光准教授には「宝庫を開く―足立文化へのアーケオロジー―」と題しお話をいただきました。当館の元専門員でもある真田准教授には、そもそもなぜ足立区にこうした美術品が伝来しているのか、発見の前提となる地元の郷土史家の方々による研究の紹介、そして、史料保存に対する博物館の取り組みなどについて説明してくださいました。

先生方にご報告いただいた後、休憩を挟んで、スペシャルレポートとして、船津文淵の日記等の解説を担当された元江戸東京博物館学芸員の山崎尚之氏にもご参加いただき、文淵の日記の内容についてお話をいただきました。日記には食に関する記述が多く、文淵が甘党だったことや、文淵没後には娘が引き継いで日記を書いていること、また画業関係の記

述もみられることなどを紹介していただきました。

報告が終わった後には、パネルディスカッションも行われ、活発な議論が交わされました。

今回のスタディデイを通じて、様々な角度から足立の文化について掘り下げることができました。先生方をはじめ、ご出席いただいた方々にお礼申し上げます。



パネルディスカッションの様子

西加平神社新社殿落成

矢沢 幸一郎

五月二十六日、西加平神社の社殿落慶式典が行われました。

つくばエクスプレス六町駅周辺の再開発事業のために一時閉鎖された区画整理の進行を待っていた西加平神社の社殿が落成し、その披露を兼ねた落慶式典が行われました。すでに遷座式は済んでいて、この日は町内の人々や近隣の神社関係者などを招いてのお披露目でした。

江戸時代の初めに綾瀬川は花又村榎戸で南へ真つ直ぐに流れる川になりました。そして嘉兵衛新田は東西に分断された村になりました。

旧嘉兵衛新田の稲荷神社は西加平の鎮守として祭られてきましたが、首都高速道路の加平インターの設置のために移動することになった石造の天祖神社を合祀し、昭和四十九年西加平神社とされました。

まだ区画整理事業は続行中で、整地された敷地には植えたばかりの若木が陽射しにさらされています。



右上:旧社殿
右下:新社殿
左上:落慶式典の様子

(足立史談会副会長)